

潜在的富士登山者の登山口選択に関する研究

山本清龍・櫻井 倫 (東大農)

要旨：富士山では毎年 30 万人前後の多数の登山者が頂上を目指す。しかし、登山者数の多さにともなう、自然資源の劣化やマナーの低下、混雑感などの心理的な負の影響が懸念されており、登山体験の質について再検討することが求められている。一方、富士山では主要な登山口として静岡県側に富士宮口、御殿場口、須走口、山梨県側に吉田口（河口湖口を含む）の合計 4 つがあり、それぞれに登山者を引きつける魅力、登山口選択の理由となりうる登山道の自然的、社会的特性があると考えられる。そこで、本研究では、自然公園の適正利用や地域振興の観点から潜在的な富士登山者の期待と登山口選択、選択理由について把握し、あわせて属性との関係性についても解析を行った。その結果、富士山の登山口ごとに期待と選択理由に差異が見られ、属性との連関についても明らかにした。

キーワード：富士山、登山者、登山口、選択

I はじめに

富士山では毎年 30 万人前後の多数の登山者が頂上を目指す。しかも、大半の登山者が富士山頂で御来光を見ることを一つの目的として行動していることから、夜明け前に頂上付近の登山道において大行列が発生するなど、どうしても時間的空間的に登山者が集中しやすい(1)。それゆえ、登山者数の多さにともなう自然資源の劣化やマナーの低下、混雑感などの心理的な負の影響が懸念されており、登山体験の質について再検討することが求められている。一方、富士山では主要な登山口として静岡県側に富士宮口、御殿場口、須走口、山梨県側に吉田口（河口湖口を含む）の合計 4 つがあり、それぞれに登山者を引きつける魅力、登山口選択の理由となりうる登山道の自然的、社会的特性があると考えられる（図-1）。現在の富士山の空間利用の現状は解決すべき問題ではあるが、その前に、4 つの登山道の特性を把握することによって、たとえば、空間利用の分散化の可能性を検討し、意味ある登山口の選択を通して適正利用の促進と登山口周辺地域の活性化に結びつけることが可能になると考えられる。以上のような視点に立ち、本研究では、自然公園の適正利用や地域振興の観点から富士登山者の登山意向と期待、登山口選択、選択理由について把握し、あわせて属性との関係性について明らかにすることを目的とした。登山ルート選択に関する既往の研究成果はごくわずかに確認できる程度である(2)。しかし、単純化されたモデルによる検討が多く、ルート選択の理由など登山者の意識に踏み込んだ研究はほとんど見られない。それゆえ、本研究は登山者意識を通してルート選択を明らかにするもの

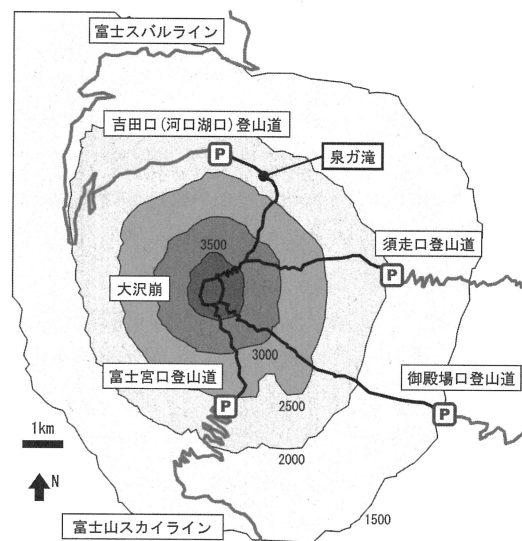


図-1. 富士山全体図

と位置づけられる。

II 研究方法

1. 調査方法と調査対象者 すでに触れてきたとおり、研究対象地は近代日本の象徴であり、自然公園制度の発展初期段階において重要な役割を果たした富士山である。とくに近年、文化的景観を保全するために世界遺産登録にむけた取り組みが始まっているため国民的関心の高い山であるが、利用者数の急激な増加によって登山者の体験の質が脅かされることが懸念されている。登山者の意識を把握する場合、実際の登山者を対象とすることが多いが、混雑を避けてこれまで登山したことがない人や今後登山をする可能性がある人（＝潜在的富士登山者）を

Kiyotatsu YAMAMOTO and Rin SAKURAI (Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo, Yamanakako-mura Minamitama-gun, Yamanashi 401-0501)

A study on the choice of climbing route made by potential climbers at Mt. Fuji.

表-1. 調査票の配布数と回収数

配布日	曜日	配布場所	配布数	回収数	回収率
2009年1月11日	日曜日	富士川楽座	500	136	27%
"	"	朝霧高原	300	63	21%
2009年1月17日	土曜日	富士川楽座	500	171	34%
"	"	朝霧高原	400	111	28%
2009年1月25日	日曜日	ふじおやま	509	123	24%
"	"	富士	405	130	32%
合計			2614	734	28%

含めて検討できるよう調査を設計した。具体的には、2009年1月の3日間に富士山南麓にある静岡県内の4つの道の駅において、無作為に道の駅利用者を抽出し、調査への協力依頼に対し同意を得た者へ郵送回収式のアンケート調査を配布した（表-1）。

2. 調査票の構成 調査票には、年齢や性別、住所、登山経験の回答者の属性に関する項目のほか、富士登山への意向（4選択肢）と期待（自由回答）について質問を設けた。また、肯定的登山意向を持つ回答者にはさらに利用したい登山口（4選択肢）とその理由（12選択肢；複数選択可）についても回答を求めた。

III 結果

1. 属性 2,614通の配布に対し734通を回収しその回収率は28%であった。属性をみると、年齢が50～60代が多く両者をあわせると過半数に上った（表-2）。また、性別では男性がやや多く、富士山南麓にある道の駅という調査地の特性を反映して東海地方の回答者が約3分の2を占めた。さらに、富士登山の経験ではほぼ半数の回答者でなく、残りの約半数は富士登山の経験があった。

2. 登山意向と期待 回答者の富士山への登山意向は、「必ず登りたい」「機会があれば登りたい」「あまり登りたくない」「絶対に登りたくない」の順に86, 367, 198, 63人となり肯定的な登山意向が多かった。次に、肯定的登山意向を持つ回答者に「富士山に登るにあたってどのようなことを期待していますか?」、否定的登山意向を持つ回答者に「富士山へ登りたくない理由を教えてください。」という質問を設けて、自由記述による回答を求めた。たとえば、「富士山がきれいであってほしい」という期待を持ち肯定的登山意向を持つ人がいる一方で、「富士山が汚いから」という理由で否定的登山意向を持つ人もいる。両者の記述は内容がまったく異なるように見えるが、片方は期待でありもう片方は期待の阻害であるため、両者を同じ期待という軸で整理することが可能である。そこで、既往の知見③を参考にして富士登山に対する期待を分類して区別して把握を行った。その結果、①公園資源の享受（345件）、②野趣性・独居性の保持（34件）、③

表-2. 回答者の属性

属性	人	割合
年齢	10代(18以上)	3 0.4%
	20代	50 7%
	30代	116 16%
	40代	114 16%
	50代	203 28%
	60代	201 27%
	70代	43 6%
	80代	1 0.1%
性	男	397 54%
	女	333 45%
住所	北海道	2 0.3%
	東北	3 0.4%
	関東	185 25%
	北陸・甲信越	41 6%
	東海	487 66%
	近畿	7 1%
	中国	1 0.1%
	四国	2 0.3%
	九州	3 0.4%
登山経験	なし(0回)	367 50%
	1回	204 28%
	2-3回	96 13%
	4-9回	29 4%
	10-19回	9 1%
	20回以上	9 1%

注：有効回答数=734

適切な対人関係の構築（28件）、④情報・施設の円滑な利用（74件）、⑤清潔・快適な空間利用（88件）の5つの期待が把握でき、①公園資源の享受の期待が最も多かった。そのほか、「自分が健康な状態であってほしい」などのように自身の健康や体力、登山に対する興味について記述した回答が237件把握できたが、富士登山に対する直接的な期待ではないため区別して把握した。ところで、これらの登山者の期待の中には、充足されやすいものや阻害されやすいものがあると考えられるため、期待と登山意向の関係について分析を行った。図-2は5つの期待ごとにどのような登山意向が持たれているかを図示したものであるが、多くの期待は肯定的登山意向へとつながっているのに対し、②野趣性・独居性の保持の期待の約半数はすでに阻害されて否定的登山意向となることが明らかとなった。また、健康・体力・興味がなると富士登山に対して否定的な登山意向を持つことも明らかとなった。

3. 登山口選択と期待、理由 肯定的登山意向を持つ回答者が利用してみたい登山口は富士宮口、吉田口、御殿場口、須走口の順に多く、それぞれ250, 94, 88, 44人だった。さて、ある登山道では期待できることが別の登山道では期待できないといったように、登山口を選択す

る上でどのような期待を持つかは重要と考えられる。そこで、次に、回答者が利用してみたいと回答した登山口別のどのような期待が持たれているのか分析を行った(図-3)。その結果、御殿場口や吉田口からの登山を希望する回答者は他の登山口を希望する回答者よりも①公園資源の享受の期待が多く回答された($P<.05$)。反対に、富士宮口の利用を希望する回答者では他の登山口を希望する回答者よりも①公園資源の享受の期待が少なく回答された(Fisher's exact test; $P<.01$)。そのほかに、登山口選択と期待の間に有意な関係はみられなかった。続いて、回答者の登山口選択についてより積極的な理由を見出せるよう選択肢を用いて回答を求め、回答者の登山口選択とその理由の関係について分析を行った(図-4)。用いた選択肢(項目の省略名と選択者数)は「家から最短の時間・距離(アクセス:270人)」「魅力的な自然・文化資源(魅力資源:67人)」「体への負担が少ない(負担少ない:52人)」「山頂までの最短ルート(最短:49人)」「混雑を避けられる(混雑回避:28人)」「自分のペースでゆっくりできる(ゆっくり:66人)」「利用できる施設が多く便利(利便施設:51人)」「情報提供が充実(情報充実:21人)」「清潔・快適に登山ができる(清潔快適:6人)」「危険が少なく安全(安全:55人)」「今までに利用したことがない(未利用:62人)」「その他(その他:67人)」の12である。分析の結果、富士宮口の選択理由ではアクセスの良さや山頂までの最短ルートであるという理由が多く(Fisher's exact test; $P<.01$)、混雑回避や未利用の回答は少なかった($P<.05$)。須走口の選択理由では未利用が最も多かった($P<.01$)ほか、御殿場口の選択理由では、須走口と同様に未利用が多く($P<.05$)、山頂までの最短ルートであることや安全は少なく回答された($P<.05$)。最後に、吉田口の選択理由では魅力的な資源があることや利便施設があることが多く回答され($P<.05$)、アクセスの良さや山頂まで最短ルートであるという理由は少なかった。

4. 属性と意識 潜在的富士登山者の登山意向や期待、登山口選択とその選択理由について明らかにしてきたが、被験者の属性の影響も考えられるため、属性とそれら意識の関係について分析を行った。表-3はクロス集計結果

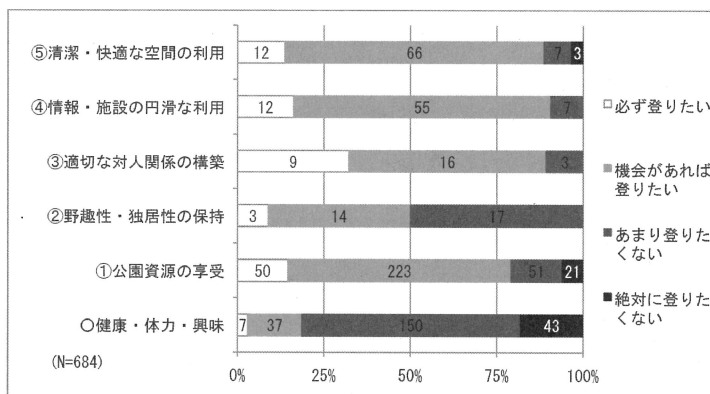


図-2. 富士登山に対する期待と登山意向

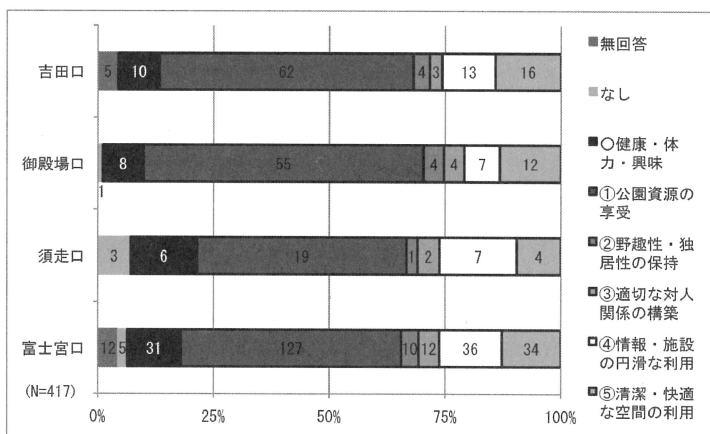


図-3. 回答者が利用してみたいと回答した登山口と期待

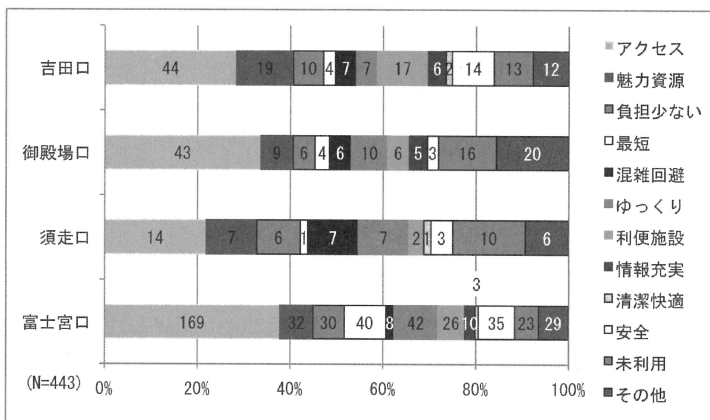


図-4. 潜在的富士登山者の登山口選択とその理由

の分布とカイ2乗検定 (Fisher's exact test) をもとにして、回答者の属性と意識の連関を正と負に区別して把握し、有意な連関を一覧にして整理したものである。これをみると、20~30代の若年層や男性、登山経験が2~3回の回答者で肯定的登山意向が多く、年齢が50代や女性、登山経験が1回の回答者で否定的登山意向が多かった。属性と期待との関係では、20代や富士登山の経験がない回答者において①公園資源の享受の期待が多かった

表-3. 回答者の属性と意識の連関表

	肯定意向	否定意向	健康	期待①	期待②	期待③	期待④	期待⑤	富士宮	須走	御殿場	吉田
年齢	20代	++	--	++								
	30代	++	--					+		-		
	50代	--	++									
	60代								+			
性	男	++	--									
	女	--	++									
登山経験	0回		-	++		-	--		--		++	
	1回	--	++								--	
	2-3回	+	-				+		+			
	アクセス	魅力資源	負担少い	最短	混雑回避	ゆっくり	利便施設	情報充実	清潔快適	安全	未利用	その他
年齢	20代		-									
	30代			--		-						
	40代						+					
	60代	++				++				+		--
性	男			++								
	女			--								
登山経験	0回		--	--		-				--		
	1回				-					+		

注:1)有効回答数=734(登山意向,期待),458(登山口,選択理由) 2)++,--:p<.01 +,-:p<.05(Fisher's exact test) 3)+,++:正の連関 - ,--:負の連関(クロス集計結果の分布により判定)

ほか、それほど強くない連関 (.01<P<.05) がいくつか把握された。登山口選択では、30代や富士登山の経験がない回答者において富士宮口の希望が少なくなり、反対に50代や登山経験が2～3回の回答者では富士宮口への希望が多かった。一方、御殿場口では富士登山未経験者で多く希望され、一度登ったことがある人で希望が少なかった。登山口の選択理由では、20～30代の若年層において体への負担が少ないことや山頂までの最短ルートであること、自分のペースでゆっくり登ることができることが少なく回答され、60代ではアクセスの良さやゆっくり登ることができること、安全性を理由として登山口が選択されていた。また、男性が最短ルートを理由とする回答が多いのに対し、女性では最短ルートを登山口選択の理由とする回答が少なかった。さらに、登山未経験者では、負担の少なさや最短ルート、ゆっくり登山できること、安全性が選択理由として少なく、登山経験が1回の登山者では、混雑回避が少なく、反対に安全性の選択理由が多く回答された。

IV 考察

本研究では、自然公園の適正利用や地域振興の観点から富士登山者の登山意向と期待、登山口選択、選択理由について把握し、あわせて属性との関係性について明らかにした。冒頭でも触れたとおり、ここでは自然公園の適正利用、地域振興の観点から考察したい。まず、潜在的富士登山者の期待として①公園資源の享受の期待が最も多く把握されたことは、富士山の管理計画において、この期待をいかに充足できるかが最重要の課題であるこ

とを指し示していると考えられる。その一方で、②野趣性・独居性の保持の期待はすでに阻害されて否定的な登山意向へと結びついており問題点として指摘できる。次に、山頂まで最短ルートであることを理由として富士宮口が選択されていたことなど、各登山口には潜在的登山者を引きつけるそれぞれ異なった特性を持つことが明らかとなった。アクセスの良さや魅力的な資源の存在、混雑を回避できることなど、各登山口から頂上までの登山で体験できる内容を明確にすることは、潜在的登山者に意味ある登山口選択を促し、単に頂上へ到達するだけでなく登るプロセスや登山前後の楽しさを提供することにつながると考えられる。なお、実際の公園管理においては、情報提供の方法や内容が登山口選択に影響を及ぼすと考えられ、より実践的な研究成果も必要であるが、今後の課題としたい。最後に、本研究は静岡県戦略課題研究(2008-2009年度受託研究)として実施したものであり、関係各位のご理解とご協力に感謝する。

引用文献

- (1) NHK 甲府制作 (2009.10.18) 真夏の不夜城-富士山
- (2) Yasushi SHOJI et al. (2008) Estimating annual visitors flow in Daisetsuzan National Park, Japan. J. For. Res. 13(5) : 286-295
- (3) 山本清龍 (2007) 自然公園利用者の富士登山に対する期待と期待阻害. 環境情報科学論文集 21 : 129-134